榊山神社だより

令和５年７月
37号

七月二十二日(土)　宵祭り
子供手踊り・子供相撲・
大道芸・富籤

七月二十三日(日)　本祭り
子供神輿・山車曳き・巫女舞
消防音楽隊・餅投げ・景品交換

■　例大祭に向けて

コロナ感染症が二類から五類に変りマスク生活は少し残るものの正常な生活に戻りました。それに合わせ今年の二月に町内会の代表者にご足労を願い今年の夏まつり（例大祭）を以前のように取り組んでいただくよう協力をお願いしたところ賛同を得て進めることとなりました。

祭元は植苗木、富籤は長根、余興は川西、注連縄は元中組、行燈は元野尻で執り行うこととなります。

四月に全員協議会を行い取り組み状況の報告をしていただきましたところ、少子高齢化に伴い以前のようにできない、コロナ感染症の期間何もしていなかったので忘れてしまったなど問題が山積していました。参考資料などを利用して知恵を出し合い取り組んで祭りを斎行する方向で準備しております。

暑い夏まつりではありますが多くの方に来て参加いただき盛り上げてほしいと思います。

特に今年は小学校統合に伴い児童は福岡区にとどまらず、田瀬、下野、高山の児童も参加できるお祭りとなります。子供がお祭りに参加すると子の親、祖父母等が祭りに出かけてきますので従来より多くの人手になりそうです。

この榊山神社例大祭は先人達が地域活性のために何百年と続いている大事なお祭りです。区民の皆様に概略ですが由緒をお知らせします。

■　由緒（一部抜出）

『天正天皇の養老年中（７１８）のことである。神仏を敬い信心深い荒田栄久入道という人がいた。この人の住んでいた庭にある日突然空より杉苗が七本落ちてきた。どうしたことかと驚いていると、急に、長男が「われは牛頭天皇（建速須佐之男命）の神木なり、このところの守護神として長く庄内を守らん」と口走ったのである。さっそくこの苗木を植え、森となして社殿を建て「飛天王」と呼んで氏神として祀った。ここが植苗木と呼ばれる ところとなった』

この地を護る氏神となる

『元弘建武（１３３１～１３３４）の頃、世が乱れ　この里も戦乱の巷と化した。敵軍に包囲されたとき　社殿に向かって、「我が軍を守らせよ」と祈ったところ神社より白羽の矢が二本敵陣に飛び込んだ。と、見る見るうちに雷鳴轟き車軸を流す大雨となり敵は逃げ去った』

後醍醐天皇の皇子宗良親王を護った事により「総社祇園牛頭天王」の八字を大書し扁額を奉られた。そのことにより飛天王社から牛頭天王社(現榊山神社)と改称

大永六年（１５２６）苗木城築城の折

『移転に際し牛頭天王社より、白気棚引きて如く霞覆い新城則ち霞ケ城高森と号す』

氏神を高森(苗木)に移築
現在の榊山神社宮地にて

『氏神を勧請すべしと促人数神輿を迎える処、今の宮地に至り神輿盤石の如く不動役士奇異の思いをなし、進めよ、行けよ鞭を以て供奉の者を打てとも押せとも尚動かず』

裏面へ

苗木伝記より

『一人の小童口走りて曰く、吾は牛頭天王なり、高森に行くことあらじ　此所主神相応の地なれば跡を垂れ長く荘内を守らん』

近世三百年に亘る永い歳月の間には、冷害・風水害・干魃・長雨・病虫害などの自然災害によって、忽ち農作物が不作になり凶作へと至る。享保年間からの高山村庄屋見聞日記にも、宝暦一二年(一七六二)「四月十七日、田瀬村あられ降り申候、大栗ほどつつ有之」と記し、また明和四年(一六七六)「四月七日の夜の霜、八日の朝殊の外当り、下切・向知原・木積沢・蛭川之内いしきなど、麦の穂出不申、草麦にて刈り取……困窮仕り申者御座候」とあって、たびたびの飢饉に村人は、ヰ・栗・山午蒡・りょうぶ・ぜんまい・わらびなどを採り、寒中にはわらびの根まで掘って食べた。

寛永の飢饉につき隣町『付知町史』は、「寛永一八年(一七六七)は、旱魃が続いて水稲など収穫皆無、秋には例年より早く大雪が降り、大地は凍み抜いて竹木まで枯れ、鳥獣も痩せ疲れて飢え死にし、鹿の皮も紙のように薄くなった。翌一九年は全国的な飢饉になり、村人はむしろわら・葛葉の類まで食糧にして露命をつなごうとしたがその甲斐なく、餓死した者は加子母村七〇〇余人・付知村九〇余人・田瀬村五〇余人、その他、牛馬等の家畜・山野の鳥獣など屍(しかばね)となって川原に押し出され、飛び石のように散乱し、まさに生き地獄の様相であった」。

※福岡町史等より

このような災害・飢饉・疫病により疲弊した時代に神の御加護にすがる思いでこのたたき祭りが行われる事となった。

神社の主祭神、牛頭天王(建速須佐之男命)は荒神であるが疫病退散の神でもある。植苗木の地より移転する際の状景と飢饉疫病退散を合せた態により、参詣の人の頭や背中を榊で叩く事で、厄除け、無病息災、家内安全のご利益を与えるのである。

■神宮大麻百五十年

毎年年末頒布または社頭で頒布する神札は地域の守り神の「榊山神社」、伊勢の神宮の「天照皇大神宮」の二つを氏子の皆様に頒布しております。受けた神札を家の神棚に祀って神社に行かなくても家でお参りすれば神社に行ったことと同じとなります。其の神札で「天照皇大神宮」の神札を神宮大麻と言い、今年で頒布百五十年の節目を迎えることとなりました。伊勢神宮は日本の守り神である為、全国の神社を通じて頒布が行われるのです。

古くは【伊勢の御師】と呼ばれる神職により伊勢神宮を崇敬する人達の為に祈祷し、祈願をこめた【御祓大麻】に由来します。南北朝時代（十四世紀半ば）には頒布を全国に広げて活動していた。この伊勢の信仰がしだいに広がり江戸時代には全国の九割の家庭で【御祓大麻】が祀られていたといわれます。明治の世になり【伊勢の御師】の制度がなくなり【御祓大麻】も廃止となりました。しかし、お伊勢さま信仰していた人達の願いを受けて当時の官庁（神祇省）が明治天皇の思し召しにより【神宮大麻】として頒布されるようになりました。明治五年より今日まで毎年、伊勢神宮で奉製されて神職関係者により祈祷祈願の大麻頒布式が行われる。各県に配られ県神社庁にて再び大麻頒布式が行われ、各市町村の神社にて神職氏子総代により大麻頒布式が行われます。多くの方たちの祈願により私達の家庭に配られる有り難い神札と言えます。

百五十年の節目の年を迎え、家庭での祭りのあり方を見直し、「ありがとう」と手を合わす姿を子、孫に見せる事は末代まで心豊な生活となると思います。

安産祈願、初宮詣、厄除け、車のお祓い、七五三祝いの正式参拝の予約を承ります

お問合せ先

宮司　深谷 耕平

宅☎0573－72－2892